



日本女子大學  
教授 青木 生子 著

# 日本古典文學

大學講座

### 著者略歴

大正9年 東京生れ  
昭和16年 日本女子大学卒業  
昭和19年 東北大学国文科卒業  
昭和19年 日本女子大学講師，助教授をへて  
昭和33年 教授となり現在に至る

昭和三十六年八月一日発行

著 者 青 木 生 子

発 行 者 高 瀬 兼 介

印刷所 三朋印刷製本株式会社

発 行 所

東京都世田谷区北沢五丁目七三四番地  
日 本 女 性 文 化 協 会

この書は

若き日日 自らの人生を高めるために

刻苦して愛読した

私の 精神的遺産である

# 日本古典文学 目次

|                |   |
|----------------|---|
| 第一章 古典と現代…………… | 八 |
|----------------|---|

|                 |   |
|-----------------|---|
| 第一節 古典のいのち…………… | 八 |
|-----------------|---|

|                   |    |
|-------------------|----|
| 第二節 古典文学を身近に…………… | 一三 |
|-------------------|----|

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第三節 日本文学と世界文学…………… | 二二 |
|--------------------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 第二章 日本文学の源泉…………… | 三〇 |
|------------------|----|

|                |    |
|----------------|----|
| 第一節 神話・伝説…………… | 三〇 |
|----------------|----|

|                |    |
|----------------|----|
| 第二節 英雄の物語…………… | 三七 |
|----------------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 第三節 恋愛のロマンス…………… | 四三 |
|------------------|----|

|                |    |
|----------------|----|
| 第四節 民謡の発掘…………… | 五三 |
|----------------|----|

|     |        |    |
|-----|--------|----|
| 第五節 | 抒情詩の源泉 | 六二 |
|-----|--------|----|

|     |     |    |
|-----|-----|----|
| 第三章 | 万葉集 | 七二 |
|-----|-----|----|

|     |        |    |
|-----|--------|----|
| 第一節 | 万葉集の世界 | 七三 |
|-----|--------|----|

|     |           |    |
|-----|-----------|----|
| 第二節 | 第一期の作家と作品 | 七六 |
|-----|-----------|----|

|    |      |    |
|----|------|----|
| 一、 | 舒明天皇 | 七六 |
|----|------|----|

|    |      |    |
|----|------|----|
| 二、 | 有間皇子 | 八〇 |
|----|------|----|

|    |     |    |
|----|-----|----|
| 三、 | 額田王 | 八二 |
|----|-----|----|

|     |           |    |
|-----|-----------|----|
| 第三節 | 第二期の作家と作品 | 九〇 |
|-----|-----------|----|

|    |      |    |
|----|------|----|
| 一、 | 持統天皇 | 九〇 |
|----|------|----|

|    |      |    |
|----|------|----|
| 二、 | 柿本人麿 | 九一 |
|----|------|----|

|    |      |     |
|----|------|-----|
| 三、 | 大津皇子 | 一〇二 |
|----|------|-----|

|    |      |     |
|----|------|-----|
| 四、 | 大伴皇子 | 一〇四 |
|----|------|-----|

|    |      |     |
|----|------|-----|
| 五、 | 高市黒人 | 一〇九 |
|----|------|-----|

|             |    |
|-------------|----|
| 六、志貴皇子…………… | 一一 |
|-------------|----|

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第四節 第三期の作家と作品…………… | 一二 |
|--------------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 一、山部赤人…………… | 一三 |
|-------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 二、山上憶良…………… | 一八 |
|-------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 三、大伴旅人…………… | 二六 |
|-------------|----|

|              |    |
|--------------|----|
| 四、高橋虫麻呂…………… | 三三 |
|--------------|----|

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第五節 第四期の作家と作品…………… | 三七 |
|--------------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 一、大伴家持…………… | 三七 |
|-------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 二、大伴坂上郎女…………… | 四六 |
|---------------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 三、家持をめぐめる女性…………… | 五一 |
|------------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 四、狭野茅上娘子…………… | 五一 |
|---------------|----|

|                 |    |
|-----------------|----|
| 第六節 作者不明の歌…………… | 四四 |
|-----------------|----|

|           |    |
|-----------|----|
| 一、東歌…………… | 四四 |
|-----------|----|

|         |     |
|---------|-----|
| 二、その他の歌 | 一八一 |
|---------|-----|

|            |     |
|------------|-----|
| 第四章 抒情詩の流れ | 一六六 |
|------------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| 第一節 平安朝以後の和歌 | 一六六 |
|--------------|-----|

|           |     |
|-----------|-----|
| 第二節 古今和歌集 | 一六八 |
|-----------|-----|

|            |     |
|------------|-----|
| 第三節 王朝女流歌人 | 一六八 |
|------------|-----|

|        |     |
|--------|-----|
| 一、小野小町 | 一六八 |
|--------|-----|

|        |     |
|--------|-----|
| 二、和泉式部 | 一六八 |
|--------|-----|

|              |     |
|--------------|-----|
| 第五章 物語の誕生と発展 | 二〇七 |
|--------------|-----|

|            |     |
|------------|-----|
| 第一節 物語について | 二〇七 |
|------------|-----|

|               |     |
|---------------|-----|
| 第二節 竹取物語とその発展 | 二二二 |
|---------------|-----|

|         |     |
|---------|-----|
| 一、宇津保物語 | 二二六 |
|---------|-----|



|             |    |
|-------------|----|
| 二、落窪物語…………… | 二九 |
|-------------|----|

|                    |    |
|--------------------|----|
| 第三節 伊勢物語とその発展…………… | 三〇 |
|--------------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 一、大和物語…………… | 三三 |
|-------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 二、平中物語…………… | 三三 |
|-------------|----|

|                   |    |
|-------------------|----|
| 第四節 女流の日記・随筆…………… | 三四 |
|-------------------|----|

|             |    |
|-------------|----|
| 一、蜻蛉日記…………… | 三四 |
|-------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 二、和泉式部日記…………… | 四〇 |
|---------------|----|

|              |    |
|--------------|----|
| 三、紫式部日記…………… | 四一 |
|--------------|----|

|            |    |
|------------|----|
| 四、枕草子…………… | 四二 |
|------------|----|

|               |    |
|---------------|----|
| 第六章 源氏物語…………… | 四五 |
|---------------|----|

|                  |    |
|------------------|----|
| 第一節 源氏物語の世界…………… | 四五 |
|------------------|----|

|                 |    |
|-----------------|----|
| 第二節 光源氏の生涯…………… | 五三 |
|-----------------|----|

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 一、榮華の時代……………      | 二五三 |
| 二、憂愁の晩年期……………     | 二六四 |
| 第三節 紫上の愛の探求……………  | 二七一 |
| 第四節 宇治の物語……………    | 二七六 |
| 一、薫の宿命……………       | 二七六 |
| 二、大君の結婚拒否……………    | 二八一 |
| 三、浮舟の恋愛悲劇……………    | 二八六 |
| 第五節 源氏物語の美しさ…………… | 二九三 |
| 第七章 伝統と創造……………    | 三〇三 |
| 第一節 古典時代の意義……………  | 三〇三 |
| 第二節 中世の文学……………    | 三〇五 |
| 第三節 近世の文学……………    | 三一一 |

## 第一章 古典と現代

### 第一節 古典のいのち

日本の文学は何にもまして私達の心の表現である。わが民族の古典文学を語ろうとすると、私のささやかなこの体験をはじめに記すことを許していただきたい。

それは、私達の生きている時代というばかりでなく、おそらくこれまでの日本歴史を通じて最大な民族の試練を受けた、あの敗戦時代に私の思いは連なる。日本人であることの誇りを徹底的にうちのめされ、生きる心の支えを完全に失った虚脱状態がすべてをおおっていた。その頃、私は文庫本の万葉集と簡単な地図を片手に、一人何ということなく、食糧や交通の不便を冒して奈良、京都をめぐり歩いた。戦火を免れた古都の自然は静かにそこにあった。千年以上

も経た古寺や仏像が、私にどんな深い感動を与えてくれたか、私は容易に記すすべをしらない。少なくとも私の心はそれによってはじめた救われたのである。日本の文化がそこにある。その血を受けている私の心がそこにある。それをひしひしと感じた体験を私は生涯忘れまいと思つたことである。

過去の文化遺産をいたずらに否定するところから、我々の明日の正しい進路はきりひらけない。法隆寺や正倉院の御物などは、世界に比類のない最高級の古い宝物である。薬師寺の美しい裳腰をつけた三重塔を仰ぎ、唐招提寺の庭に歩をふみ入れたとき、或いは法隆寺の百済観音や夢殿の救世観音の姿に接して、私達はこれらのわが祖先のまぎれもない魂の世界にひき入れられ、自分の中にもいわれぬ、ある力が湧いてくるのを感じるのである。これらをつくった精神がまたあの万葉集を生み出したのである。それはかの造形美術よりはるかに生身の人間の息吹きを伝えてくれているものであることはいうまでもない。先年、法隆寺の壁画は過失によってあつてなく焼失した。あまりにも美しいが故に焼いてしまいたいという理屈にもならない一青年の衝動によって金閣寺もまた消滅した。大小諸々の我々の文化遺産が近い頃でも、このように消えてゆくことを思うにつけても、それに比べ、かの万葉集をはじめ、多くの精神的遺産

である古典文学は、日本人の存在するかぎり、否、人間の存在しうるかぎり、心から心へ永久に生きつづけてゆくことであろう。よく考えれば不思議なことであり、ありがたいものではないだろうか。

日本のものは何にでもあれ、最上のものとうぬぼれた結果が招いた失敗を、かつて我々は深く体験した。万葉の歌の一部が、盲目的愛国心から盛んに利用されたことは、かえって万葉にとり有難迷惑なことであった。かと思えば、源氏物語が、皇室の不倫にふれたものとして一部を削除されたり、あやうく不敬罪にとわれようとしたことがあった。我々が一時の悪夢から覚めて、大きな世界を見わたす心の平静さをとり戻したとき、万葉は決して偏狭な愛国心を煽情する文学どころではなく、源氏物語は、猥褻なエロ小説とおよそ次元を異にするものであることが今更確認された。目前の何かのために利用しようとして色眼鏡をかけてみると、このように、相反する評価や賛否が行われる実例をこれでもしることができる。しかも万葉も源氏も依然としてもののあるがままの存在として、いよいよその輝きを不動に放っているのである。

古典文学とはおよそこのように時代の風雪に耐えて、静かに力強く我々の前に存在を主張し

つづけている作品である。それは単に時代が古くて珍らしいから尊重されるべきものではない。そうなら骨董品と同じで、老人の手なぐさみにまかせておけばよい。古いということだけなら、新しい方がよいにきまっている。古いという稀少価値が我々の現代の生活にとって何の意義をもつというのであろうか。古典は実は古くてしかも新しいものである。といつても、それなら、新しいものが沢山ある現代に、古いものからわざわざこれを求めるまでもないといえる。そこで今、我々が古い新しいといっている言葉の奥に、実は無意識裡に、価値の問題にふれていることに気付かねばならない。古典は、古いから尊いのではなく、価値があるから尊いのである。古典の典という字は、元來、「兀」即ち「几」「机」の上に、「冊」即ち書物をおくかたちを表わす。それは同時に、その書物に対して価値を尊敬する意を表現したものである。このように、古典は単に古い書物を意味するのではなく、その本質は、価値のある書籍を意味し、これを尊重し、規範、典拠とすべき精神から生み出された言葉である。

古典文学にとって最も重大なのは、その精神的価値である。それは古典のいのちといいかえてもよい。それは地下からこんこんと絶えることなく湧き出るいずみにたとえることができる。そのつぎることない滋味をすくいとることによって、生命の渴きはいやされ、明日への力を

与えてくれるものである。我々は何よりも現代に生きている。古典文学は決して我々を懷古趣味に誘うべきはすののではない。そこには人間の最も根本的な姿と命とが存在している。多くの歴史をみても、人間が真の文化建設をはかるときは、必らずこの人間の根本的なものがます省みられている。十四、五世紀、イタリアに発し西欧全般に波及したルネサンスは、一口でいえば、中世において喪失した人間を再び蘇らせるために古代ギリシャに帰る運動で、そこから新しい人間、近代が発を始めたのであった。そして、ゲーテが『イタリア紀行』で、古代ギリシャやイタリアのルネサンスに深く学んだように、私達も日本文化のメッカである大和の古典の地を自ら求め歩くことが大きな収穫となってくれるであろう。私達はここでは、古典文学という精神の故郷にそうした心の旅を試みようとするのである。

## 第二節 古典を身近に

古典を尊重するということは、これを神棚に捧げて拝礼することではない。私は先に、現代

に生きる我々として古典のいのちに触れる大切さをのべたつもりである。いうならば、古典を最も我々の身近に感ずるということから、すべてが出發されなければならない。

古典がいかに尊重されるべきものであり、これこそを真剣に読むべきであるとは、読書法の第一頁にいつもいわれていることで、或意味でそれはすでに耳にたこのよっていることかもしれない。といってそれではこの態度が我々の身についているといえるであらうか。否、これがなかなか実現しがたいものであるが故に、かくもくりかえし説かれねばならないという事実をも直視する必要がある。古典をよむべきだとは頭でしりながら、とかく敬遠しがちなのが、これもまた古典文学に対する我々の真相である。それは何故だらうかと自分の経験をふりかえってみるのも大切である。

日本の古典文学に最初おめにかかるのは、大抵、国語の教科書においてである。それは日常目にふれる現代文とは肌合のちがった、古文という難解な衣をまとっている。まずつきあたるのは、この言葉の障壁である。文学はいうまでもなく言語芸術であるから、言葉そのものが解らなくては、その芸術の本質にふれることができない。

その点、音楽や絵画や彫刻のような芸術は、もっと直接に何人にもとびこんでゆける世界を



開いているともいえる。そこで、古典文学の世界ではまずこの言葉そのものを、音や色彩と同じように自分のものにする必要がある。ところがそれはそう簡単な業ではない。正確を期するためには実に多くの研究の継続が必要とされる。この研究をいくら無限におしすすめていっても、これでよいということはない。それはいつしか言葉のための言葉の研究に、足をふみ入れてしまうこともありがちである。言語学の研究としてはそれもよいのだが、古典文学は、何よりも文学であり芸術である。言葉を借りて表現されている芸術の心そのものが、このために見失うことになれば、本末転倒というべきである。文法や語釈に追われて、肝心の文学の本質にふれる以前で、疲れはてるという結果も、多くの経験するところであらう。

たしかに、このように言葉の障害が、古典文学を容易に私達に近づけない大きな理由といえよう。では言葉がすみずみまで完璧に克服されなければ、古典文学は解らないというのであるか。ところで、近代文学の露伴や鷗外、漱石の作品にも相当むずかしい言葉が出てくる。しかしこれらを一々辞書をひきながら読む人があらうか。多少の言葉の難解はのりこえて、本質にせまる読み方をしている。

古典文学に接する場合も、近代や現代の作品をよむ態度と同じであるべきだと思う。大胆な